マルクス主義とアイロニー
遠山茂樹における「昭和史」の叙述

パリ・ディドロ大学博士課程
トリスタン・ブルネ
（Tristan Brunet）

はじめに

本論文は、昭和や大正といった時代の出来事そのものを叙述するのではなく、これらの時代をめぐる歴史叙述について考察することをテーマとしている。特に取り上げるのは、1955年に出版された、遠山茂樹、今井清一、藤原彰の共著『昭和史』である。当時一大ベストセラーとなったこの現代史は、確かにマルクス主義の路線にしたがった歴史書でありながら、執筆者の中で最も令名高かった遠山茂樹の個性的ともいえる歴史学のスタイルが反映されていた。そこで、今回はとりわけ、この遠山に特徴的なスタイルの本質と意味に焦点をあてて論じることにしたい。

周知のように、戦後の日本では『講座派』のマルクス主義歴史学が熱狂的に受け入れられた。その理由はおもに二つある。一つは、それまで日本の歴史学を支配していた実証主義歴史学に対し、それが明確に民主主義的な立場、すなわち、民主主義を防衛する歴史学としての立場を打ち出したことである。当時の歴史家の目には、実証主義的な歴史学が中立性に終始するあまり戦争を防ぐことができなかったのに対し、マルクス主義歴史学は民主化を進める歴史学という正当性を保持しているかに映じたのであった。二つ目として、マルクス主義歴史学が、日本の軍国化と「ファショ化」を説明しうる科学的な枠組みをもっていると観念されたことである。

1. 講座派の歴史家は日本の現代史をどう見ていたか

講座派の歴史家たちの基本的な観点は、歴史を支配階級と被支配階級の対立と捉えることであり、著者によっては、被支配階級は、国民や大衆と同一視された。他方、支配階級の権力は、「天皇制」と名づけられる支配体制を基本とする。それは、明治維新以来、完全な近代化を達成しなかった日本の国民国家において、歴史的には絶対王政に相当するものと考え

られた。これも周知のように、この日本の近代化と資本主義の本質をめぐる点こそ、1930年代にマルクス主義者の労農派と講座派のあいだで交わされた日本資本主義論争の中心的イシューであった。

唯物史観がモデルとする人間社会の発達史観によれば、もろもろの人間社会は歴史を通して奴隷制、封建制、資本主義、そして最終的に共産主義へと到達する。野呂栄太郎らが仮説として提示した講座派の分析と歴史観からすれば、明治の段階において、日本は完全な資本主義社会を形成することができなかった。特に農業の分野において、収穫の五割にものぼる現物小作料を搾取する地主小作関係は、社会の「半封建的」な関係をしめしていると解釈された。日本の下部構造の歴史的な展開の遅れ（大部分がヨーロッパ・モデルを基盤にした歴史観）は「天皇制」の基礎となり、苛酷な労働条件を生み出して、独裁的な権力関係を発生せしめた。これが歴史的な制約となって、日本のデモクラシーの発達を妨げたのである。

支配階級の構成をみれば、まずは天皇制によって守られる地主と資本家があり、そこに国民国家の構造を支える軍部と官僚が加わる。さらに、支配体制の表象であり、ヒエラルキーの頂点をなす絶対君主たる天皇とその周辺、支配階級を代表する合法的な政党が存在する。

国民の構成は、支配階級と比べれば不明瞭であるが、まず（天皇制からの）自由、民主主義、平和を心の底から望む国民がいた。彼らは被支配者としての意識によってヒエラルキー化されていた。このヒエラルキーの中で、国民の歴史的な本質を代表する労農階級、そして天皇制の本質を最も明瞭に意識した組織である日本共産党が、国民の歴史的な意味での民主主義的運命の前衛に立つ。それに対し、この歴史観によれば、歴史意識が極度の混乱を来している中産階級は欺かれやすく、他の国民のグループに比べ支配階級の企む戦争を支持する傾向にある考えられた。天皇制は、国家のある一定の状態だけではなく、支配階級の矛盾を通して歴史的な諸潮流を生じさせる。まず利益の増大を願う支配階級は、天皇の神秘的な権威、官僚と軍部の抑圧を介して階級の統治を維持する。とりわけ、天皇制はおのずから帝国主義な侵略をも生み出す。日本の資本主義は苛酷な労働関係を基盤としているため国内市場は極めて狭隘であって、成長を続けるには、新たな市場たる植民地を帝国主義的な侵略で不断に獲得せねばならないというのである。

2. マルクス主義歴史学は大正・戦前の昭和をどう見ていたか。

端的に言えば、天皇制という構造の内部にある限り、政党政治は本当の民主主義ではなく、支配階級の内部での勢力均衡を反映するにすぎないと考えられた。「大正デモクラシー」に

おける護憲運動や普選運動なども本質的に民主主義的な運動ではなく、支配階級の中で政党の権力を増大させる運動だと考えられた。民主主義をめざす国民の闘争は、天皇制との闘争である。このため労働運動や日本共産党は、歴史における国民の真の民主主義への要求を代表する。逆に、共産党に対する抑圧は天皇制の本質的に独裁的な性格を表している。こうした観点からすれば、天皇制があるかぎり、日本が戦争を防ぐことは不可能であった。唯物史観の歴史の法則からして、天皇制は必然的に戦争へと導かれたのであり、したがって戦争責任は、支配階級のすべてにあるのである。また機械論的で目的論的なこのモデルによれば、1924 年ー27 年の若槻内閣と 1929 年－31 年の濱口内閣で外務大臣を担った幣原喜重郎の「協調」外交が目指したのは、実際には平和の希求でなく、英米の帝国主義の後を追い、ただ中国に対する侵略と戦争を先延ばしにするためであった。

3. マルクス主義歴史家の役割

重要なのは、マルクス主義の歴史観によれば、戦後歴史学の目的は、日本国民に正しい歴史意識を伝えることだったということである。この唯物史観に基づく科学的モデルは、そこで確立される歴史意識を基礎に国民に自信を与え、日本を民主化とへ導く歴史学であると考えられた。民主主義で必然的な歴史学である。日本国民は、階級闘争という歴史の客観的な法則や、民主主義の障害という天皇制の歴史的な本質を理解すれば、おのずから民主化するのである。遠山も言うように、新たな現代史叙述は、「歴史を解釈するものとしてではなく、歴史を変革するものとしての歴史学を樹立しようとする意欲の表現」であった（遠山,1952,18 項）。

次に論じるべきは、このマルクス主義歴史学の歴史解釈そのものではなく、歴史家たちが、みずからの解釈を戦争を経験した日本人読者にどのように伝えたかということである。彼らはどのようにして、ある一定の社会的な環境の中で、読者の記憶との繋がりを作り出そうとしたのだろうか。

4. 歴史の真の意味をあらわにする物語的な戦略

講座派マルクス主義者による日本の現代史の特徴を探るために、彼らの物語的な戦略に注目したい。例えば、井上清は現代史の叙述にさいし、それまで天皇制が採用してきた日本史の視点を、闘争の物語によって言語的に逆転する戦略をとった。羽仁五郎の「闘争史」の影

響を受けた井上の歴史叙述においては、日本史の真の主体は、支配体制に抗して闘争する国内の様々な集団である。井上が鈴木正四と共著で出した『日本近代史』の大正時代の叙述を読めば、そこでは支配体制である天皇制の時間ではなく、民主主義のために闘争した様々な集団の時間が強調されていることがわかる。この著作の中では、平塚らいてうの新婦人協会や被差別部落の水平社がはたした役割に多くのページが割かれており、まさにそうした人々が、日本の歴史の主体として、歴史の過程において中心的で代表的な運動を担ったのである。井上の歴史観によれば、日本の歴史は、民主主義を目指す国民の闘争によって構成されなければならないのであった。

同時に井上は、国民や大衆を歴史の発展の原動力とみなすことで、天皇を中心にすえた歴史を日本史から徹底的に排除しようとした。天皇制は日本人の歴史意識を汚染したのであり、歴史における天皇の主体としての立場を奪わない限り、日本国民の解放はやって来ない。些細な点に見えるかもしれないが、その意味でも、井上の歴史学が天皇の即位によって与えられる元号を時代の指標とすることはありえないことだった。井上の歴史学は、闘争を描く歴史であるというだけではなく、それ自体が、闘争する歴史でもあったともいえよう。それはオーソドックスな科学的な歴史でありながら、日本国民の真の解放のため、その歴史意識と記憶の奥底に潜む天皇制の残滓に対して戦いを挑んだのである。

5. 遠山茂樹の現代史のスタイル

遠山茂樹（1914-2011）は、本質的にマルクス主義の歴史家であったといえる。遠山も、講座派的な観点に基づいて日本史の解釈をおこなった。とはいえ、1955 年に出版された現代史のベストセラー『昭和史』を読めば、彼の歴史学のスタイルが井上のものとは異なっていたことがわかる。遠山の歴史は、天皇中心の歴史と闘う歴史ではなく、その歴史を実際に経験した読者の共感をうることを目的としていたのである。

確かに、『昭和史』のはしがきからは、彼の歴史学が支配階級と国民の対立に焦点をあてた典型的な講座派の歴史学であることが明らかにみてとれる。

> なぜ私達国民が戦争にまきこまれ、おしながされたのか、なぜ国民の力でこれを防ぐことができなかったのか。
>
> かつて国民の力がやぶれざるをえなかった条件、これが現在とどれだけ異なっているかをあきらかにすることは、平和と民主主義をめざす努力に、ほんとうの方向と自信をあたえることになるだろう(遠山,今井,藤原　1955　ⅱ)。

だが、遠山におけるマルクス主義歴史学が他と異なるのは、『昭和史』の叙述が、皇太子裕仁が皇位についた時点を出発点としているということである。ある意味で、それが「昭和史」である限り当然の処置とも言えるが、先に井上清の例で言及したように、唯物史観からすれば、即位の時期などは歴史における偶然の領域に属し、かつ、天皇制の時間に深く根付いた出来事である。つまり、科学的な歴史叙述においては、まったく意味のない出来事である。遠山自身がこれを認めている。

> 天皇個人の死は、近代国家にあっては、歴史の動きに本質的なかかわりをもたない偶然の事件にすぎず、時代を画する意味をもつものではない。

では、なぜ遠山はその時点で昭和史を始めたのだろうか。それは著者自身がはっきりと説明している。

> 当時の新聞は「君民一致、世界平和」をいみするのだと説明をくわえ、若い新帝の治世に「昭和中興、万機一新」を期待する支配者の言葉をのせた。その後の昭和の歴史は、この元号にことよせた意味とはおよそうらはらに、天皇制の危機と戦争の歴史となったのだか、この時の支配者は、こうした未来を知るよしもしなかったものの、たしかに時代が一つの転換期にさしかかっていたことを感じていたにちがいない(遠山,今井,藤原,前掲書,3 項)。

遠山が昭和史の執筆にさいしてこの出来事を出発点とした理由は、天皇制の枠組みの中で日本国民が経験した歴史（すなわち国民の集合的記憶）と、実際に国民を戦争へと導いていく客観的な下部構造の働きとのあいだの距離を表そうとしたからであった。必然的に悲劇へと突入する歴史の過程において、天皇制の枠組みがもたらす歴史意識は、国民と支配階級の双方を巻き込む幻想にすぎなかった、というのである。遠山は、読者の記憶の中に存在する天皇制を、アイロニーによって表現しようとしている[1]。そうした手法を通じて、読者の経験した歴史に触れようとしているともいえるだろう。天皇制の時間によって形成された日本人の集合的記憶に触れるために、あえて天皇制の時間を参照し、日本国民の集合的記憶がもつアイロニカルな本質を提起する。「かつて歴史はこのように語られた。これほど素晴らしい未来がやってくるはずだった。みなさんも覚えているでしょう。でも結局は、正反対の結果に至ったのです。その理由はこうです」遠山はこのように読者に語りかけ、彼らの記憶の奥底に触れようとしたのであった。

遠山茂樹の歴史学のスタイルとは、支配階級の歴史意識を混乱した無意味なものとして表

1　ここで「アイロニー」とは、ヘイドン・ホワイトの言う意味での出来事の形象化の一類型を表わしている。

象しつつ、彼らが科学的な歴史観を持ちえなかったがゆえに、その統治が日本を破局へと導いたこと、幻惑的な歴史によって国民を欺き、みずからの利益の増大を量りながら、彼ら自身、非科学的な歴史観に捕われることによって、アイロニカルにも、自身を含むすべての日本を壊滅させたことを表現するものである。

だが、戦争へと至る大正と昭和の歴史は、支配階級のみならず、被支配階級にも共有されていたのであり、遠山のアイロニーは、天皇制の統治下にあった国民自身の経験、歴史意識の混乱にも叙述をもたらそうとする。『昭和史』が五・一五事件に触れた後、永井荷風の日記を引用するのはそのためである。

> 永井荷風は「つらつら思ふに今日吾国政党政治の腐敗を一掃し社会の気運を新にするものは蓋武断政治を措きて他に道なし。（省略）」と日記に記した。国粋主義には縁遠い思想をもち、後年同じ日記に軍人の横暴を強くののしった荷風が、満州事変直後、このようにのべているのは、五・一五事件におどろきながら、被告の言動にある共感をもった、国民のかなりの部分の感じ方を代表するものであった［後略］。そして軍部と政党・重臣・財閥との間の政治的摩擦が、対立として眼にうつりやすく、そこから軍部や右翼の財閥攻撃の言辞が何か「革新」を意味するかの幻想を生みがちであった(遠山,今井,藤原,前掲書 ,73 項)。

ここで強調されているのは永井荷風の実感のアイロニー的な側面であるが、それは「国民のかなりの部分」の主体性の本質をなすものとして提示されている。歴史の主体たる国民は、天皇制に対して論争を挑んだ労農階級だけでなく、知識階級や中間階級も含まれる。『昭和史』が再構成しようとする歴史意識とは、広い意味で捉えられた日本人の主体性であり、それを基盤にしつつ日本人の集合的記憶に触れることで、読者の共感を誘う歴史叙述が目指された。

当然ながら、こうしたアイロニーは、典型的な講座派的唯物史観が指摘するような、天皇制の矛盾の膨張を表現している。だが遠山の歴史叙述では、それがもっぱら戦争を経験した読者の記憶につながるための手段として使われている。アイロニーは、その効果として読者を納得させ、感動させるための物語の核心的な手段と化す。遠山はこうして、国民の大多数が、みずからの記憶と合致する歴史的な構造を受け止め、心を動かされる歴史を書こうとした。つまり、民主主義を育成するための歴史を書こうとしたのである。このようなアイロニーは、歴史意識の混乱を抽象的に階級によって焦点化するだけではなくて、個人の内奥に潜む感情を表現するパターンとなる。遠山の歴史叙述は、国民の記憶と歴史意識にとって意味の喪失として経験された戦争を、機械論的の講座派マルクス主義の歴史学の分析につなげる

ことができる。先に見たように、井上清の歴史学は、闘争を描いただけでなく、それ自身が国民の大多数の歴史意識に闘争を挑んだ歴史学であった。それに対し、遠山茂樹の歴史学は、ある意味において、国民の心に触れ、そこから共感の輪を広げていこうとするタイプのマルクス主義歴史学であったといえるのではないだろうか。

6. 遠山のアイロニーの失敗

だが、遠山のアイロニカルなマルク主義歴史学は、失敗に帰したと言わざるを得ない。出版直後にベストセラーとなった『昭和史』であるが、それは評論家の亀井勝一郎の激しく批判の的となった。亀井は戦争のプロパガンダに参加した浪漫派の知識人で、戦後になって再び転向した人物である。よく知られているように、亀井にとって我慢ならなかったのは、『昭和史』の叙述があまりに人間性を欠いているように思われたことであった。

> 読み終ってまずふしぎに思ったことは，この歴史には人間がいないということである。「国民」という人間不在の歴史である。個々の人間の名は出てくる．敗戦に導いた元兇とか階級闘争の戦士の名は出てくる。ところがこうした歴史に必ずあらわれねばならない筈の「国民」が不在だ（亀井,1956,63 項）。

亀井は『昭和史』を典型的な講座派の叙述としてみなしていたのであり、その批判の矛先は、遠山の歴史学というより、講座派の現代史解釈そのものに向けられていたといえるだろう。亀井は文学者として、遠山の歴史叙述を、人物の描写が薄っぺらく、官僚が書くような悪文で 、人間ではなく階級のみを扱った歴史として批判したが、その真の敵は、講座派全体の歴史解釈とスタイルである。しかし、亀井は、遠山と講座派的なマルクス主義歴史学一般を同一視することで、アイロニーによって表現される『昭和史』の「人間性」（読者のアイロニー的な記憶と結びつき、共感をえようとする物語的で文学的な戦略）を完全に捉えそこなったのだといえる。

遠山の現代史叙述は、唯物史観が無視しがちな政治的事件や軍事的な出来事に注意を払いつつ、アイロニーによって、現代史そのものを満身で経験してきた読者の記憶に触れようとしている。天皇制に汚染された歴史は、その目的に反する結果しか生み出さず、よって事態はアイロニーによって、風刺として表現されるしかないということ、それが遠山の叙述を通し、伝えられるはずであった。つまり、遠山の考えた「人間のいる歴史」であった。興味深いことは、1952 年、遠山自身が、政治的事件や人物描写を欠く歴史を「人間不在」な歴史として批判いたということである。

彼らの歴史には、どこにも人間の姿が出ておらず、階級闘争のぶつかりあう響きは聞こえない。人間のいない、法則だけの世界。だがそれは歴史ではない。歴史にあっては、法則は人間のあり方を通してのみ実現する。人間を語ることなしに、法則だけを取り出すことはできぬはずだ（遠山,前掲書,18 項）

亀井の批判が、井上清ではなく、『昭和史』に向けられたのは不思議としか言いようがない。イデオロギー的には真逆の立場にいたとはいえ、亀井も遠山も、彼らが想像した日本国民の歴史への「意欲」に応答し、彼らに受け入れられる歴史を書くためには、そこに人間性を組み込むことが不可欠だと認めていた。両者にとって、人間性のない、人間を描かない歴史は、専門家には受け入れられたとしても、国民たる日本人の心を掴むことは到底できないと考えられていたのである。その主張は、歴史上の人物だけでなく、歴史書を読む人々の人間性に触れるような叙述をすべきだ考える言う点で、共通していた。

当然のことながら、亀井と遠山が人間性という言葉で指し示していた内実は異なる。亀井にとって人間とは美学的に定義される日本人のことであり、他方、遠山にとっては階級的人間のことである。だが人間性が、歴史家、読者、叙述される歴史上の人物にあまねく触れるものとして観念されたされたという点では同じである。もちろん、こうした共同性の背後には、日本人の記憶の枠組みとその枠組みに対する日本人の感受性を、日本人のアイデンティティーと同一視するという姿勢があり、それが戦後日本の歴史観に遺贈されてしまったのだと言うことはできる。いずれにせよ、結局、『昭和史』をめぐる論争は 1960 年、解決にいたらぬままに立ち消えになった。

遠山と亀井の歴史観がイデオロギー的に対立していた限り、両者はそのままのかたちでは交わることはありえなかったであろう。だが彼らの論争によって、歴史、特に戦争の歴史を書くさいには「人間性」を反映するべきだという論調が起こり、以降の現代史叙述に強い影響を与えることになった。注意すべきは、亀井と遠山の論争は、「人間性」の定義は異なれど、それが日本国民の歴史への「意欲」を国民的アイデンティティーの構築と結びつけたことである。論争の場における最大公約数はここにあったのだということができる。

最後に、一個のアイロニーとして言及しておきべきは、遠山自身が、この論争おいてみずからの歴史学を弁明するにあたって、その科学性（唯物史観にしたがった歴史叙述）を前面に打ち出したことで、結局その「人間性」にとって核心とも言えるアイロニーを徐々に消失せしめたことである。1959 年に出版された『昭和史』の新版は、ここに、考えうる限りもっともオーソドックスな唯物史観の書物となった。

参考文献

遠山茂樹,今井清一,藤原彰,1955 『昭和史』（初版）、岩波新書　（新版は 1959 年）

遠山茂樹,1952 「歴史における偶然性について」『思想』1952 年 2 月号

亀井勝一郎,1956「現代歴史家への疑問—歴史家に『総合的』能力を要求することははたして無理だろうか」『文芸春秋』、1956 年 2 月号

井上清、鈴木正四 1956『日本近代史　下巻』合同新書、

大門正克（編）2006 『昭和史論争を問う』日本経済評論社

Hayden White, 1973 “Metahistory”, John Hopkins University Press